

ヴァンクーヴァーにおける華人コミュニティと 華人秘密結社洪門民治党の現状

The current status of the Chinese community and the Chinese
Freemasons (Chinese secret societies) in Vancouver

安田 峰俊*

要 旨

カナダ、ブリティッシュコロンビア州ヴァンクーヴァーは北米でも華人系住民が多く、メトロ・ヴァンクーヴァー全体では人口の25%を占めると見られている。現地の華人系社会の特色をなすのは、広東語を母語とする広東・香港系華人の比率が高いことと、19世紀以来の老華僑の移民者、20世紀末の香港人の移民者、21世紀以降の大陸系中国人の移民者という、移民時期や文化背景によって移民者に3層のカテゴリーが形成されている点である。清朝中期の華南で形成された、中国人の相互扶助組織である秘密会党（洪門）は、アヘン戦争後の移民熱に従い広東省から世界各国の華人社会へと広がった。これはカナダにおいても例外ではなく、その組織は現在もなお存在し、ヴァンクーヴァーを中心としてカナダ全土の華人社会に根を張っている。本稿は、先行研究が必ずしも多くない19世紀から現代にかけてのカナダの華人社会の変遷を概観したうえで、中国語資料と現地での聞き取りをもとにカナダにおける洪門の歴史と現状を論じるものである。

* 立命館大学人文科学研究所客員研究員

Abstract

Vancouver, British Columbia, Canada is home to many residents of Chinese descent even by North American standards, and in Metro Vancouver overall, they are believed to account for 25 percent of the population. The area's Chinese community is characterized by a high proportion of people of Guangdongese and Hongkonger descent whose mother tongue is Cantonese, and also by the formation of three categories of immigrants according to the period of immigration and their cultural background, namely the *Old Huaqiao* (*Rōkakyō*) first-generation immigrants from the 19th century onwards, Hongkonger immigrants from the end of the 20th century, and mainland Chinese from the 21st century onwards. The secret society of the Tiandihui (Hongmen) is a mutual aid organization of Chinese people that was formed in the mid-Qing dynasty in southern China and spread from Guangdong Province to Chinese communities worldwide following the emigration fervor after the Opium Wars. Canada was no exception, and the organization still exists today having taken root in Chinese communities across Canada with a focus in Vancouver. This paper outlines the transition in Canada's Chinese communities from the 19th century to the contemporary period for which there is not an extensive corpus of previous studies; it discusses the history and current situation of the Tiandihui in Canada based on Chinese language materials and interviews conducted in the area.

キーワード：華人、華僑、洪門、中華会館、洪門民治党

Key words : overseas Chinese, Chinese immigrants, Hong men, Chinese benevolent association, Chinese Freemasons

2018年12月、筆者はカナダ、ブリティッシュ・コロンビア州（以下、BC州）ヴァンクーヴァーのチャイナタウンを訪れ、カナダ華人の重要なコミュニティ組織である中国洪門民治党駐加国温哥華支部（The Chinese freemasons Vancouver branch。¹⁾ 以下、カナダにおける洪門民治党を「カナダ洪門民治党」もしくは「カナダ洪門」と表記する）および、現地の華人コミュニティをまとめる「四大僑団」の一角をなす中華会館（The Chinese benevolent association of Vancouver）を取材する機会があった。

両者の建物はチャイナタウンの中心部で隣接しており、またカナダ洪門民治党ヴァンクーヴァー支部の前主任委員（ヴァンクーヴァー洪門達権社現副社長）が中華会館の現理事長を務めているなど、組織的に近い関係にある。カナダ洪門民治党および中華会館は、やはり隣接する孫文中国庭園（Dr. Sun Yat-Sen Classical Chinese Garden）およびメトロ・ヴァンクーヴァー中華文化センター（Chinese Cultural Centre of Greater Vancouver²⁾）などのチャイナタウンを象徴する文化施設群とも密接な関係を持ち、ヴァンクーヴァーの華人コミュニティの中核となる存在のひとつである。

本業が中国関連分野を報じるジャーナリストである筆者は、日本の出版社・小学館の業務を受任して彼らを取材した。しかし、これにより知り得たカナダ華人やカナダ洪門民治党の歴史と現状については、むしろアカデミックの場における情報の蓄積と共有に帰すべきであろうと考えた。ゆえに本小論を記すものである。

なお、筆者は学部・大学院時代に歴史学および文化人類学的な視点から華南の伝統地域社会史を研究テーマに選んでおり、華南の伝統社会と密接な関わりを持つ華人の秘密結社についての関心を特に強く持ってきた。ゆえに本稿では特に「秘密結社」として伝統的に知られているカナダ洪門民治党についての記述を主とし、中華会館についての記述は従とするにとどめた。

1. ヴァンクーヴァー華人社会の概観

カナダ西海岸 BC 州の中心都市であるヴァンクーヴァーは、社会にリベラルな気風が強く移民に寛容なカナダ国家の諸都市のなかでも、多元主義が特に強く根付いている街である。暖流の影響を受け、北国カナダとしては極めて温暖な気候や、太平洋を挟んで東アジアの諸国と「隣接」する地理的な要因もあって、19 世紀から中国系・韓国系・日系など東アジア系移民の流入が進んできた。

特に中国系住民の人口規模は大きく、カナダ統計局による 2016 年統計³⁾では、総人口 456 万 240 人の BC 州において中国系カナダ人は 50 万 8480 人に達する。これは BC 州の総人口の約 11% を占める数字であり、彼らは同州内のヴィジブル・マイノリティとしては突出して大きな存在感を持つ集団となっている（中国系住民の多くはメトロ・ヴァンクーヴァー区域内に居住しており、同域内での人口比は 25% を超えているとみられる）。カナダに帰化せず中国大陸・香港・台湾などの国籍を維持している永住者や留学生・労働者らを含めれば、BC 州の華人⁴⁾は 100 万人規模に達すると見られ、北米で最も多くの華僑・華人が暮らす地域となっている。

ヴァンクーヴァーのチャイナタウンは北米でも有数の規模とされ現地の華人コミュニティの政治的・文化的な中心地としての象徴的意味を持っている。しかし、同地付近には非華人の麻薬中毒者が多く暮らし、治安の悪化や建築物の老朽化も深刻であるため、20 世紀末以降にヴァンクーヴァーに移民した華人の多くは南部のリッチモンド市（メトロ・ヴァンクーヴァー区域内）やヴァンクーヴァー市の東部郊外などに生活の拠点を置く例が多い。なかでもリッチモンド市はユニークな存在であり、近年の報道では人口 20 万人ほどのうちで華人人口が 7 割に達するとされ、北米最大の華人の集住地となっている。

後述のように華人の BC 州への移住・移民は 19 世紀より何度かのブームを

迎えつつ、現在まで陸続と続いている。現地の華人らは歴史的経緯から広東系が多く、おそらく最多を占める。これは前出のカナダ統計局の2016年統計において、BC州における中国系カナダ人のなかで中国系言語を母語とする者40万8415人のうち、広東語（Cantonese）の母語者が約47%の19万3530人、官話（Mandarin）の母語者が18万6325人、ほか潮州語・閩南語・台湾語など広義でいう閩南語（Min Nan [Chaochow, Teochow, Fukien, Taiwanese]）の母語者が1万1210人、上海語など呉語（Wu [Shanghainese]）の母語者が4540人、客家語（Hakka）の母語者が2325人、閩東語（Min Dong）の母語者が230人などとなっていることから裏付けられる（ちなみにカナダ全土で中国系言語を母語とする者は125万3360人で、うち広東語母語者は約45%の56万5270人、官話母語者は59万2040人となり、わずかながら官話母語者が上回っている）。

ブリティッシュ・コロンビア大学カナダ華人学教学・研究計画（Initiative for Student Teaching and Research in Chinese Canadian Studies）が刊行したヴァンクーヴァー華人史『JOURNEYS OF HOPE』（ISTRCCS [2018]）によれば、華人が最初にカナダの地を踏んだのは、清の乾隆年間末期の1788年である⁵⁾。マカオから英国人とともに渡航した広東人の木工職人がカナダ西海岸の先住民ヌートカ族（Nuu-chah-nulth）の土地に至り、英国人を相手とした商業活動に従事していた模様だが、当時の中国は海禁政策下であり、これに続いて移民する者はまだいなかった。華人による北米西海岸への大規模な渡航は、アヘン戦争終戦後の1842年に中英間で結ばれた南京条約による公行廃止・貿易自由化と、1849年の米国カリフォルニア州における金鉱脈発見を端緒とするゴールド・ラッシュによって本格的に開始されることとなる（なお、BC州でのゴールド・ラッシュは1858年から始まった）。

王〔2011〕⁶⁾は、華人のカナダへの移住の歴史を5段階の時期に分けている。すなわち、①ゴールド・ラッシュを背景にした金鉱の採掘者として、ま

た奴隷制廃止後の北米における安価な労働力需要の増大に応じてカナダの大陸横断鉄道の建設現場に労働者として向かった、主に独身男性からなる初期移民の移住期である第1期（1858年～1884年）、②華人移民の増加を憂慮したカナダ政府により、華人を対象とした人種差別的な人頭税が課せられた入国制限期である第2期（1885年～1923年）、③続いてカナダ政府による華人排斥法の成立から廃止に至るまでの華人排斥期である第3期（1923年～1947年）、④華人排斥法は撤廃されたもののまだ入国制限が続いていた第4期（1947年～1967年）、⑤カナダ政府が人種差別的な移民制限政策を撤廃して、移民法改正（1962年）とポイント・システムの導入（1967年）をおこなったことで、華人の流入が大幅に緩和された第5期（1967年～）という区分である。

ただしこの第5期は長期間に過ぎるため、筆者としては⑥香港返還が決定した1984年の中英連合声明から1989年の六四天安門事件、1997年の香港返還を経て、中国支配に不安を抱いた香港人の移民が急増した期間を第6期（1984年～1998年。この時期は、中国国民党の独裁を嫌ういっぽうで社会の自由化と経済発展により出国・移民のハードルが下がった台湾人のカナダへの移民も増えた）、⑦返還後の香港の安定や、カナダ社会での香港人男性の就職難を背景として香港からの脱出熱が一段落した後、中国大陸の経済発展を通じて官話話者の中国人（中華人民共和国出身者）の移民が増大した期間を第7期（1999年～現在）として設定しておきたい。過去の各時期の華人移民をめぐる細かな動向については王〔2011〕や、特に香港人移民の動向にフォーカスした谷垣〔2010〕⁷⁾に詳しい。

ここで全体的な傾向を大づかみに記すならば、①～③の期間に、主に労働者として海を渡った華人男性やその家族らの移民たちは、広東省珠江デルタ地帯において相対的に経済が立ち遅れていた四邑（新会・台山・開平・恩平）の出身者が多く、特に台山出身者が多かった。ほかにはやはり珠江デルタの南海・番禺・順徳の「三邑」や、マカオに近い中山県の出身者など、いずれ

も広東語を母語とする地域の人々が中核を占めた⁸⁾。彼らはヴァンクーヴァーやトロントなどカナダ各地の伝統的なチャイナタウンの建設者であり、老華僑として現在のBC州の華人コミュニティの基層を形成する人々となっている。後述するカナダ洪門や、故郷の各地名を冠した会館や宗族ごとの宗親会、中華会館をはじめとした伝統的な僑胞組織も、当初は彼らによって組織されてきた⁹⁾。

いっぽう、④～⑤の時期には中華人民共和国の建国や、中国国内の政治・経済混乱により中国大陸での前途に不安を抱いた人々がカナダへと渡っている。台湾経由の人々を除けば、彼らの多くはいったん香港を経由する形で海を渡っており、ある程度は広東語圏に組み込まれた人々であった（また香港自体も文革中に大規模な暴動が起きるなど政情が不安定であり、やはり華人移民の送出国としてのプッシュ要因が存在した）。英領香港が中華人民共和国に返還されることに不安を持った⑥の時期の移民たちと合わせて、20世紀までの華人移民の共通語は広東語であった。

⑥の時期のピークであった1994年には、年間4万人以上の香港人がカナダへと移民しており、あまりの香港人の多さから「ホンクーヴァー（香港人のヴァンクーヴァー）」という造語が生まれるほどであった。ただし、これらの香港人移民については、従来の華人移民の主体であった出稼ぎ者や政治・経済難民とは異なって、出国時点で故郷の香港がすでに先進国水準の経済発展を遂げており、一定の経済的基盤を有する中産階層以上の人々が移民をおこなっていたこと、また当時英国領であった香港の出身者は英語を解するために、カナダ社会での住居探しをはじめとする生活基盤の構築や、非華人系の職場での就業が相対的に容易であったことから、往年の華人移民のようにチャイナタウンを経由せずに直接リッチモンド市などに居住し、老華僑のコミュニティと深く接しない例も多く見られた¹⁰⁾。

最後に1999年ごろから現在まで続いている⑦の時期である。今世紀に入り急増した中国大陸出身者のカナダへの移民熱は、従来広東語を共通語と

し、またそれゆえの言語的・文化的差異や各華人移民の出国の経緯ゆえに中華人民共和国に対して一定の政治的・心理的距離感を置いてきたBC州の華人社会の様相を、根本的に塗り替えるものとなっている。2010年代からは中国国家の対外政策が、従来の韜光養晦政策から積極策に転じた影響もあり、中国大使館・領事館などを通じた海外華人への文化的支援や政治的な働きかけも強まるようになった。また、2018年4月には華人コミュニティ側からの長年の働きかけを受け、ヴァンクーヴァー市長のグレゴール・ロバートソンが、過去の時期（上記区分でいう①～③の時期に相当する）において市が華人差別的な政策を実施していたことを認めて謝罪する¹¹⁾など、過去のカナダ華人の歴史に向き合う動きも活発化している。

また⑦の時期には、中国共産党の高級官僚（裸官）が財産の海外移転や政治的なリスクヘッジを目的として妻子を海外移住させる目的地としてカナダを選ぶ例も多く、新たな移民の形態が出現している¹²⁾。

いっぽう、近年はカナダ社会のリベラル化にともない中国系カナダ人の政界進出も活発となっており、中華会館 [2016]¹³⁾ によれば2006年～2016年にカナダ連邦議員として全国で16人（定数338議席）、BC州議員として地元から5人（定数87議席）の華人系議員が当選しているほか、ヴィクトリア市では1999年～2008年に華人（Alan Lowe）が市長を務めた。英語名で表記された姓の発音を見る限り、現時点での華人議員たちは広東系の老華僑もしくは香港系と見られる人々が多数を占めるが、中華会館やカナダ洪門の関係者によれば、連邦議員の黄陳小萍（Alice Siu-Ping Wong）や閔慧貞（Jenny Kwan）、BC州議の屈潔冰（Teresa Wat）らの、香港で生まれ育ってからカナダに移住した（＝老華僑ではない）中国系カナダ人議員たちも、中華会館やカナダ洪門との関係が密接である¹⁴⁾。選挙における得票上の理由もあって、伝統的なチャイナタウンの僑胞団体と、相対的に新参者である香港系移民の政治リーダー層との接近・融合が発生しているのであろう。

現時点において、中華人民共和国生まれの華人議員はバーナビー市議の王

白進（James Wang¹⁵⁾）などごく少数しか存在しないが、今後は最新の移民グループたる彼らの政治参加や、その政治リーダー層による伝統的僑胞団体との接近も進んでいくと予想される。

2. カナダにおける華人秘密結社洪門民治党の展開

カナダの、ことにBC州の華人コミュニティを観察する上で、極めてユニークな存在がカナダ洪門民治党である。これは清代の華南にルーツを持つ華人の伝統的な会党（秘密結社）の系譜の中に位置付けられる組織のひとつである。同様の会党組織については、中国大陸（後述）のほか香港・マカオ・台湾など東アジアの中華圏をはじめ、フィリピンやカンボジアなどの東南アジア各国、米国のほか南北アメリカ各国や、英国をはじめとした欧州各国の華人コミュニティに、さまざまな名前を持つ組織が散らばっている。

もともと洪門をはじめとした会党組織は、1949年の「新中国」の建国以前まで、特に華中・華南の中国社会に深く根を張っていた存在である。伝統中国の政府権力は民政への介入に消極的で、官の側に社会保障や生活福祉の関連政策を積極的に実施していくという考えが薄かった。こうした社会では、庶民の生活は相互扶助に頼らざるを得ず、福祉・医療・育児支援・介護埋葬、果ては紛争の調停に至るまで、公共サービスの多くが民間に存在する中間団体によって担われることとなった。ここでいう中間団体の例としては、地域社会においては血縁にもとづく宗族、また大都市部や海外の出稼ぎ者の間においては、宗族組織の延長線上にある宗親会、または地縁にもとづく会館などが該当するのだが、これらに包括され得ない単身の男性や、地縁・血縁のバックアップが脆弱な貧困層・移住民らの間で、実質的な相互扶助システムとして盛行したのが、会党組織による結合であった。

すなわち、清代中期から存在感を増した天地会や三合会（他に紅花会、三点会、添弟会、小刀会などさまざまな呼称や組織がある）らの洪門系の組織

や哥老会（民国期以降に洪門に合流したとされる）、また民国期に力を強めた紅幫や青幫などがこれに相当する。

会党のはしりは天地会（洪門）であり、その成員間の内部における伝承においては康熙年間の福建省に発したとされ、その起源ゆえに「反清復明」を掲げる組織であった、とされている¹⁶⁾。

洪門の性質について山田 [1998] は、その実際の起源は 18 世紀の華南における寄る辺なき民の間で自然発生的に生まれた相互扶助組織であり、「反清復明」の理念もまた、単に自身らを「秘密」のイメージで覆い、他者を畏怖させるための実体なき演出であったと説明している¹⁷⁾。会党は本質的には、地縁・血縁のネットワークが脆弱な人々が作った一種の中間団体のひとつであったのだが、「秘密」を抱えつつ謎めいた儀礼をおこない、成員相互でしか通じない隠語を用いることで、仲間意識を強化してきた存在であったという。

洪門は乾隆年間の後半以降、特に福建・広東省の民間社会に深く根を張ってきた。洪門は十九世紀から世界の華僑社会にネットワークを拡大したが、これはアヘン戦争を契機とする華南の対外開放と、それに伴う華僑の移民熱に伴ってのことである。

現在、カナダの BC 州に全国総本部を置くカナダ洪門民治党もまた、その始まりは十九世紀後半にカナダ西海岸へと渡った広東系移民たちの社会より発生した（時期的には、前章におけるカナダ華人史の第一期①に相当する）。以下、黎 [2015]¹⁸⁾ を参考としつつ、トピックを立ててその歴史と現状を見ていこう。

2-1 最初期の動向

1858 年、BC 州の大河・フレーザー河での金鉱脈の発見に伴いカナダ西海岸岸でのゴールドラッシュが幕を開けると、ヴァンクーヴァー市の約 300 キロ北北東に向かった山中に位置するバーカービル（Barkerville）に広東系の華

人たちが集まり、街の南側にチャイナタウンが出現した。1963年に華人人口は約3000人に達し、その8割ほどは米国カリフォルニア州から金脈を求めて流れ込んだ洪門（美国洪順堂）の成員であったことから、同年に広東省開平出身者と伝えられる金鉱労働者・黄深貴を中心として洪順堂が建てられた。これがカナダにおける洪門組織のはしりであった。堂内には「義興公司」「建新公司」の2組織が付設され、洪門の財務や成員の福利、新成員の入会紹介、宿泊施設の提供などの業務をおこなっていたとされる。この洪順堂は1868年の火災で全焼した後、洪門成員が募金を募って空き小屋を購入する形で再建され、太平房（成員の病室）を併設する形で再開された後、1882年ごろに堂名を「致公堂」に改名した。

なおバーカービルのチャイナタウンは最盛時の1869年には5000人規模まで拡大し、洪順堂をはじめ会館や堂所は7施設を数えた。ただ、現地のゴールド・ラッシュははやくも1870年代に斜陽に差し掛かり、バーカービルのチャイナタウンは急速に衰退して1910年代には華人人口がわずか35人となり、やがて消滅している（もっともバーカービルの致公堂は1980年にBC州政府による改修を受け現存している）。

2-2 初期の組織拡大

カナダにおける洪門組織は、生活が不安定な金鉱労働者たちの相互扶助組織として産声を上げたものであり、1876年にバーカービルと同じくフレーザー河沿いの集落であるクイネル（Quesnel）にも致公堂が生まれた。その後、カナダではゴールド・ラッシュの衰退後も大陸横断鉄道の建設などで華人の廉価な労働力の需要が存在し、華人は増加を続けて都市部にも進出したことから、カナダにおける洪門組織も拡大した。1886年～1912年の期間で、ヴァンクーヴァー・トロント・カルガリー・モントリオールなどをはじめ、カナダ全土の43都市に43の致公堂が成立している。なかでも西海岸のBC州は過半数の23堂が集中していた。

2-3 中国革命への協力

やがて1887年7月、日本渡航を目指す孫文がカナダ経由で移動した際にモントリオールやヴァンクーヴァーで現地の華僑と交流し、そのなかで多くの「反清復明」を掲げる洪門成員と出会ったことが、カナダの洪門と中国革命との邂逅であった。その後、孫文は1903年にホノルルで洪門に加入し、やがて会党組織の影響を強く受けた中国同盟会(1905年)を結成、さらに洪門組織に対して同盟会会員の加入を求めた。孫文は米国カリフォルニア州に強い支持基盤を持ち、特にサンフランシスコの洪門組織との関係が強かったことで、同州に隣接するカナダBC州の洪門もその影響を強く受けた。

1911年2月、孫文はヴァンクーヴァーの致公堂を訪問して熱烈に歓迎され、中国革命支援の集金組織「洪門籌餉局」を成立させている。同年2～3月、孫文はカナダ各地の洪門組織を行脚しており、結果、同年内にカナダ全土の致公堂から11万2000カナダドルの資金が、辛亥革命やそれに先立つ黄花岗蜂起の軍費として革命勢力に流れ込むことになった。その後、1913年に黄興が袁世凱に反発する第二革命を起こした際も、カナダの洪門組織は6万3000香港ドルの寄付をおこなっている。

なお、この革命への寄与は現在でもカナダ洪門のプライドを支えるエピソードとなっているらしく、ヴァンクーヴァーのカナダ洪門のビルに隣接する中華文化センターの博物館においても、カナダ洪門が孫文を迎えたことや活発な資金援助をおこなったことが、パネル展示において強調されていた。辛亥革命後、北米の洪門組織と孫文・国民党との関係は必ずしも良好ではなかった(後述)が、そうした歴史は現在あまり意識されなくなっているようだ。

2-4 大漢公報

1908年、当時の革命熱を受け、ヴァンクーヴァー致公堂の洪門成員らが個人的な事業として反清革命を主張する華字紙『大陸報』を創刊。こちらは翌

年に停刊するが、1910年にヴァンクーヴァー致公堂の大佬（頭目）らがその事業を継承して、資金を集めて印刷設備を買い取り、やはり反清革命を社論とする華字紙『大漢日報』を創刊した（辛亥革命後の1915年に『大漢公報』に改名）。

その後、『大漢公報』は経費不足によりしばらく低空飛行を続けたが、1979年からページ数を増やして再拡大する。だが、やがて1990年代以降の香港人移民の増加に伴って、『明報』『星島日報』などの香港大手紙がカナダ版を発行しはじめたことで市場競争に破れ、1992年に停刊している。

2-5 達権社

中華民国の成立後、中国同盟会は国民党と名を変えたが、孫文が洪門の政党としての政治参加を認めなかったことで、孫文や国民党勢力と海外洪門組織の関係は急速に悪化する。海外の洪門組織の間では国民党員である洪門成員と非党員の洪門成員の間で対立が起き、ヴィクトリアでは1915年に国民党員と洪門成員の暴力衝突すらも発生。カナダ全土で約30年間にわたり国民党（および中国国民党）と洪門との衝突が続いた。結果、1915年に洪門成員の「公権」を守るという名目のもとで、姉妹団体としての達権社（Dart Coon Club）がヴィクトリアで組織され、同年中にヴァンクーヴァーでも設立された。

黎 [2015] によれば達権社は現在、「カナダ洪門の最高権力機構」として位置付けられており、カナダ洪門民治党の成員のうちで一定の加入期間を経て社員たちの賛同を得た者しか入社できないなど、洪門の上位組織もしくは秘密結社内秘密結社の如きものとして存在しているらしい。なお、カナダ洪門民治党のカナダ総本部がヴァンクーヴァーに置かれているのに対して、達権社の総社は歴史的経緯からかヴィクトリアに置かれている。1984年時点で、カナダ全土には21社の達権社があったという。

なお、私が2018年12月にヴァンクーヴァーの洪門支部を訪問した際、同

フロア内に達権社があることを確認した(ただし無人であった)。Google map においては、ヴァンクーヴァーのチャイナタウンにおいて洪門施設の住所は登録されておらず、「Dart Coon Club」の名で住所登録(116 E Pender St, Vancouver, BC V6A 1T3)がなされていた。

2-6 中華会館との関係

近年まで相互扶助の対象が会員同士に限られていた洪門とは異なり、中華会館は少なくとも理念の上では華人全体を対象とした伝統的な僑胞団体である。カナダにおける中華会館は現地の洪門組織の成立よりも20年ほど時代が下った1884年にヴィクトリア市で成立している。ヴァンクーヴァーでも1885年に前身となる団体が誕生し、1906年に正式に発足した。現在もヴァンクーヴァーのチャイナタウンの中心に建つ中華会館のビルが落成したのは1909年である¹⁹⁾。同時代の洪門は貧困層や労働者の会員が多かったが、対して中華会館は比較的豊かな商工業者が中心となっており、華人コミュニティ内のさまざまな会館や公所・堂会の代表者が参加する形を取っていた。

黎[2015]によれば中華会館は1922年には中国国民党の強い影響化に置かれ、当時国民党と反目していたカナダ洪門と対立。1925年に孫文が死去した際、ヴィクトリアの中華会館が追悼式典と追悼デモを挙行了際には、洪門会員らが騒ぎ回ってこれを妨害し、激怒した国民党関係者との殴り合いが発生したという。両者の抗争関係はその後も続き、1931年に満洲事変が勃発して日本による中国侵略が開始された際にも、中華会館が「華僑抗日救国会」、洪門が「洪門抗日社会」と別々の抗日団体を作るなど反目していた²⁰⁾。両者は1940年になりようやく「合作」し、共同して海外での抗日運動にあたった。

中華会館は中国本土で中華人民共和国が成立した後も中華民国・国民党寄りの立場を取り続けたが、加中国交樹立(1970年)を境にその姿勢が動揺し、ついに1978年に組織が「民主化」されて²¹⁾、結果的に中華人民共和国

寄りの立場に切り替わった。これは伝統的に反国民党的だったカナダ洪門との対立が決定的に解消される事態ももたらした。

現在は、カナダ洪門ヴァンクーヴァー支部の前主任委員でヴァンクーヴァー達権社の現任の副社長である姚崇英 (Hilbert Yiu) が中華会館の理事長を務め、また中華会館秘書長の王元瓏 (Michael Y Wang) も洪門の成員である。姚いわく「洪門は中華会館の重要な構成団体のひとつ」とのことで、いまや洪門と中華会館は組織的に非常に近い関係に変わっている。

2-7 洪門民治党

現在、カナダ洪門はその中核団体の正式名称を中国洪門民治党駐加総支部 (The Chinese freemasons) とし、政党を思わせる組織名を名乗っている。その経緯もやはり、20 世紀初頭の孫文との協力関係のなかで一旦は政治化した北米の洪門組織が、辛亥革命後に中国同盟会・国民党との関係を悪化させたことと関係があるようだ。

北米の洪門組織は 1918 年、米国サンフランシスコで美洲洪門致公堂第 1 回懇親大会を開き、英語名を「The Chinese freemasons」とすること、頭目を意味する「大佬」を「盟長」と呼び変えることなどを決定。続いて孫文と対立した陳炯明と連携し、1925 年にロサンゼルスで世界の洪門の関係者を集めた五洲洪門第 4 回懇親大会を開いて、今後の名称を中国致公党とすることを定めた (ただし洪門は統一性のある組織ではないため、一部は堂名をそのまま名乗り続けた。さらに香港の中国致公党は中国共産党に接近し、民主党派のひとつとして現在も中華人民共和国の衛星政党として存続している)。また、中国国内で国共間の対立が激化した 1946 年、上海で五洲洪門第 5 回懇親大会が開かれ「中国洪門民治党」を世界の洪門の統一名称とすることが定められた。

カナダにおける洪門もこれらの影響を受け、1945 年にヴィクトリアで開かれた大会で「中国洪門致公党駐カナダ総支部」、1947 年にカルガリーで開か

れた大会からは「中国洪門民治党」を名乗るようになり、駐加総支部をヴァンクーヴァーに置くようになった。

もっとも政党名を名乗ってはいるものの、その主張は改名の当初から極めて漠然としており、政治団体であるとみなすべきかは判断が難しい。カナダにおける洪門組織は1971年7月に連邦政府の認可を受けた合法団体となっており、特に第二次大戦後は政治運動よりも現地の華人コミュニティにおける相互扶助組織としての側面に重きが置かれるようになった²²⁾。

2-8 華人コミュニティの一員としての洪門

洪門は「もともと戦うという武術的な性格を持っているため」²³⁾、カナダ洪門の各支部は武術・拳法グループ（もしくは獅子舞や龍舞のグループ）を併設している。事実、ヴァンクーヴァーの洪門も建物の外部に「洪門体育会」の名を大きく掲げている。

カナダ洪門の全国組織の盟長である郭英華（Fred Kwok）は過去にカナダ武術団体連合総会の副会長を務めるなど著名な武術家としての顔を持つ。また、カナダ洪門ヴァンクーヴァー支部の前主任委員・姚（前出）は2002年～2008年にかけてヴァンクーヴァー洪門体育会の会長を務めており、彼個人もカンフー・ジムを主催している。また中華会館秘書長で洪門成員の王も太極拳の使い手で、北美武当太極協会（Wudang Taiji Society of North America）の会長と総教練を務めており、こうした関係者たちの個性を見ても、カナダ洪門と武術との強い親和性を感じることができる。

王 [2011] にれば、現在のカナダ洪門の主要な活動は年間4回の定期例会のほか、中国伝統文化を発揚するという方針から、文芸面を中心とした活動が多いとされる。すなわち、中国武術、獅子舞、中国語、中国料理、中国舞踊の講座の開設や、旅行・パーティー・映画上映会などの主催、老人福祉施設の運営といったものであり、活動内容は非常に穏健である。2000年代に入ってから、ヴァンクーヴァーでのチャイナタウンでの春節パレードも積

極的にサポートしている。

また、近年カナダ洪門に特徴的なのは、華人の遠隔地ナショナリズムゆえであるのか、第二次大戦中に起きた南京大虐殺の追悼活動や、事件を象徴する日付である12月13日を連邦もしくは州の記念日と定める政治活動に積極的にコミットしている点だ。これらは中華会館の活動としておこなわれる例が多いが、2018年11月に香港系連邦議員が南京大虐殺記念日の制定を求めて開いた大規模集會に洪門民治党オタワ支部の主任委員が参加したり、12月に洪門民治党トロント支部が発起役となってトロント市郊外に南京大虐殺記念碑を建てたりと、カナダ洪門が表に出て活動を行なっている例も少ない。

3. 現代カナダ洪門の実態、当事者の自己認識

2018年12月2日、私はカナダ洪門ヴァンクーヴァー支部の建物内で、同支部の現任の主任委員である馮治中（Cecil Fung）への聞き取りをおこなった（なお、口頭での使用言語は英語、及び一部を繁体字中国語の筆談として、録音をおこなった）。洪門の成員自身がその起源伝承をどう理解しているのか、また「秘密結社」である自分たちの組織についてどのような自己認識を持っているかがうかがい知れる内容であるため、以下に紹介する。

——洪門の起源についてどのような理解をしているか？

組織の開始は18世紀の康熙帝の時代だ。西方への軍事行動があり、少林寺の僧侶を必要とした。結果、少林寺の助けにより戦争には勝ったが、康熙帝は少林寺が清朝に反するのではないかと疑い、次の軍事行動として少林寺を倒した。5人の僧が逃げ、やがて組織を作った。組織の目的は反清復明、反政府的なものだ。反清の目的が知られれば、九族を殺害される罰を受ける。ゆえに非常に秘密の結社となった。

会員たちは、詩句（poetry）、手勢（hand signals）、Q&A（question & answers）

で仲間か否かを見分けた。北京からの暗殺者が来ても、これならわかるのだ。
——カナダの洪門のはじまりは？

ゴールド・ラッシュの際に、米国サンフランシスコから数多くの華人がヴィクトリアに来て、そしてバーカービルまで来た。1863年、多くの差別に直面し、苦しい労働をおこなう華人たちの中から（カナダの）洪門は生まれた。洪門は華人の管理団体として発展した。河川などを管理したり、テリトリーを決めたり、われわれはポリスのような存在だった。

——カナダの洪門に広東人が多い理由は？

歴史的な理由だ。（海外華人は）福建人はフィリピンに多く、潮州人はタイに多いが、広東の四邑、台山などの人間は出国の時期が遅かったので北米まで来た。当時の中国国内において、富裕な地方の人間はそのまま故郷に住めばいいが、貧しい地方の人間は出国して危険な労働者になるしかなかった。多くが独身の男性だった。

かつて、新たにやってきた英語ができない華人は、私たちのところへ来て洪門の仲間になった。そこで私たちは彼らに家や仕事を見つけてやった。多くの移民は教育を受けていなかったので、故郷から来た手紙を洪門が代わりに読み聞かせてあげたり、代わりに書いてあげたりしていた。銀行が信用できないので、金銭を預かってあげたり、故郷に送金してあげたりしていた。病気をしたとき、警察と揉めたとき、（額の大きな）買い物をするときに通訳してあげたりもした。最も大事なのはカナダにいる華人が死んだときだ。我々はその棺桶を、香港経由で故郷の村まで送ってやっていた。当時の華人たちは出稼ぎ者で、やがては帰郷することを考えていた。

——現在の洪門については？

革命が成功して清朝が倒れたため、洪門は華人コミュニティに対してサービスを提供する組織として残ることになった。こんにち、我々はBC州の政府と一緒に働いている。私たちは、2つの老人ホームを管理することを、BC州の住居担当部門から了承された。これらの老人ホームはチャイナタウンか

ら近く、低所得者でも入れる施設だ。

他には、華人コミュニティにとっての大きなイベントである春節のパレードへのスポンサーとなっている。我々は中華人民共和国の領事館と非常に近い関係にある。現在、洪門は全カナダで20支部を持ち、メンバー数は1500人～2000人だと思う。

——現在、洪門は「秘密」を持っているのか？

「秘密」はまだ持っている。だが、目的はない。お茶の儀式みたいなものだ。(会員たちが) 団結するためにセレモニーをおこなっているのだ。何かに属しているという感情を抱かせるためにある。ゆえにたくさんの秘密の儀式がある。(一部の) 儀式はYouTubeで動画を流している。

——近年、カナダに来る華人移民は香港や中国大陸出身の比較的富裕な人たちだ。過去の移民たちと違いは感じるか？

現在は過去とは流れが変わっている。1970年代から、香港から多くの移民が来たが、彼らは(往年の洪門が提供していたような) ローカルなサービスを必要としていなかった。彼らは英語ができ、またビジネスマンの人脈もあれば弁護士も知っている。1980年代～1990年代に台湾から来た人たちもそうだ。中国大陸からの移民についても、自分でインターネットができて、自分たち自身のサポートグループを持っている。ここ(洪門)に来る必要がないのだ。80年前～100年前の移民たちは、カナダに来ればまず洪門を訪れたが、現在は違う。我々(洪門)は復興して、なにか違うことをしないといけない。

——現在のチャイナタウンでは、言語の違いや世代の移り変わりによるコミュニティの分断も課題になっていると聞いたが。

中国大陸出身の移民が洪門に入る例もある。だが、私も含めて、従来の(広東系の古い)移民はマンダリン(官話)ができない。チャイナタウンに問題が生じている。

また、現在、洪門の最も若いメンバーは30歳くらいだが、われわれのミー

ティングは広東語なので、ここで生まれた（英語を得意とする移民2世以降の）若い世代にとっては難しい。彼らは中国語を読んだり書いたりするのが難しいのだ。いっぽう、古いメンバーも、（高齢化などによって）あまり活動に参加してくれなくなっている。

——現在、華人たちが洪門に入ることには、どういうメリットがあるか？

もしも（華人や洪門の）歴史に興味があるなら入ってもよい。もし合わなければ離れてもよい。これはどのボランティア・グループでも同じことだろう。ライオンズ・クラブやロータリー・クラブでもそうだ。離れる人が離れていくのは仕方ない。

馮への聞き取りからは、洪門がその起源伝承を現在もひとまず継承していること、カナダの華人社会においては「反清復明」の政治目的よりも辺境の移住民たちによる相互扶助組織や秩序維持組織としての側面を非常に強く持っていたこと、「秘密」の存在は成員間の団結を強める作用を持つ一方で「秘密」の内容は非常に空虚なものであること（もっともこれらは中国国内の洪門についても、実態は同様であった²⁴⁾）、などがうかがい知れる。加えて、現在のカナダ洪門は組織の老化が進み、華人コミュニティの変質とともに従来の社会的役割を終えつつあることも見て取れよう。なお、現在のカナダ洪門をライオンズ・クラブやロータリー・クラブのような親睦団体として表現する言説は、中華会館主任委員の姚、同秘書長の王からも聞かれ、カナダ洪門の成員間において広く共有されている認識であると思われる。

結語

以上、ヴァンクーヴァーの華人コミュニティの歴史と現状、および同コミュニティの歴史と密接な関係を持つカナダ洪門の歴史と現状を概観した。カナダの華人社会については国内での先行研究が比較的希薄な分野である

が、同国における華人系住民の長い歴史と、近年の同国における華人系移民の急増を鑑みれば、より一層の理解の深化が求められる分野であろう。本稿がそのささやかな一歩となれば幸甚である。

注

- 1) この支部は同党「駐加総支部」および姉妹組織であるヴァンクーヴァー洪門達権社 (Dart Coon Club of The Chinese freemasons of Vancouver) と同一の建物内にある。
- 2) カナダ洪門全組織の盟長 (頭目) である郭英華 (Fred Kwok) が同センター長を兼任。
- 3) Census Profile, 2016 Census, Statistics Canada, [https://www12.statcan.gc.ca/census-recensement/2016/dp-pd/prof/details/page.cfm] (2018年12月20日閲覧)
- 4) 華人という言葉の定義は難しいが、ここでは「海外に渡った中国系の人々を国籍の区分なく、包括して華人ととらえる」(陳 [2010]) という広義の理解をしておきたい。
- 5) ISTRCCS [2018], p27
- 6) 王維「バンクーバーにおける華人コミュニティ及びチャイナタウンの行事」『香川大学経済論叢』84巻1号 (2011年)、2～11ページ
- 7) 谷垣真理子「カナダへの香港人移民」『東洋文化研究所紀要』157巻 (2010年)
- 8) 谷垣 [2010]、188 (130) ページ
- 9) これらは、チャイナタウンのセンターであった中華会館の建物の2階に、1961年の時点で台山寧陽会館が入居していたことが写真から確認できること (ISTRCCS [2018], P17) や、2016年に中華会館が成立110周年を記念して刊行した会館志『温哥华中華会館壹百零拾週年記念特刊』(中華会館 [2016]) の巻末に全加開平総会館や加拿大温哥华禺山総公所 (番禺) などの広東省各地の地名を冠した会館組織が祝賀広告を多く寄せていることからもうかがい知れる (潮州会館、山東同郷会など非広東語圏の他都市・他省出身者の会館の広告も見られるが、広東語圏の会館組織の広告のほうがはるかに多い)。
- 10) もっとも香港出身者のカナダでの就業はあくまでも過去の華人移民と比較して「相対的に」容易であったにすぎず、カナダ社会では十分な収入源を得られないことから妻子をカナダに残して夫だけが香港に帰って働くという、逆出稼ぎのような不思議な現象が広範に発生している。移住先に「太太 (妻)」と子だけを置き家庭を「空」にしていることを、宇宙飛行士を意味する中国語・広東語と掛けて「太空人」と呼ぶ俗語も流行した。
- 11) 「カナダ・バンクーバー市が過去の華人に対する差別を正式謝罪」『人民網 日本語版』2018年4月24日 [http://j.people.com.cn/n3/2018/0424/c94475-9452999.html] (2018年12月20日閲覧)
- 12) 在外華人メディアなどにおいては、党官僚が愛人を住まわせる例が多いという米国口

サンゼルス郊外のローランド・ハイツが「二奶村」(愛人村)と称されるのに対して、裸官の本妻たちが多く住むとされるBC州のリッチモンド市を「大奶村」(本妻村)と呼ぶという、やや鄙陋な揶揄的表現がなされる例もある。

- 13) 中華会館 [2016]、203～205 ページ
- 14) 現地の華人コミュニティ内のメディアの報道を見ても、当該の議員らが中華会館やカナダ洪門のイベントにしばしば出席していることが確認できる。
- 15) 江蘇省出身の王白進はカナダ初の中華人民共和国生まれの議員当選者である。
- 16) その起源伝承をおおまかに紹介すれば、以下のようなものである。「清の康熙年間に起きた西方の異民族「西魯番」の反乱に対して、朝廷の兵が手を焼いたことから、康熙帝が有志を募ったところ、少林寺の一〇八人の僧らがこれに応じ、見事に反乱を平定した。だが、讒言により寺は清の官兵に焼き討ちされ、かろうじて逃亡した5人の僧が水面に浮かぶ香炉を見つけ、その底に「反清復明」と書かれているのを見て自分たちの道を決めた。彼らはやがて豪傑僧・万雲龍を大哥(頭目)として洪家のまとまりを作り上げ、やがて明の末裔・朱洪竹を盟主に推戴して反清の兵を挙げたが破れたため、5人の僧たちは各地に散って義士を集めることにした。これが洪門のはしりである——」(並木頼寿 [2005])。これは荒唐無稽のそしりを免れ得ず、史実としてそのまま受け取ることにはできないのだが、洪門の成員たちの間ではこうした説話が信じられてきた。洪門の起源伝承は1911年に発表された平山周「支那革命党及秘密結社」でより詳しく紹介されている。
- 17) 山田 [1998] 109～111 ページ
- 18) 黎全恩『洪門及加拿大洪門史論』(電子書籍版、商務印書館(香港)有限公司、2015年、下篇「楓葉國裏話洪門」)
- 19) 中華会館 [2016] 40～43 ページ
- 20) なお、国民党寄りの中華会館系の抗日運動に反発したカナダ洪門は、中国共産党の八路軍に協力している。戦後、中国国内で中国致公党が共産党の衛星政党として残されたり、こんにちのカナダ洪門が中国大使館と密接な関係を築いている淵源を考える上で興味深い。
- 21) 中華会館 [2016] 55～57 ページ
- 22) なお、米国サンフランシスコの洪門の同時代的状況について詳しく紹介した内田 [1966] [1967] は、当時の時点で他の堂会組織が相互の堂闘(武力衝突)や薬物販売・売春・賭博などの反社会的商業活動に明け暮れていたのに対して、致公党に変わった洪門は政治組織としての顔を出していた(相対的に反社会的傾向が薄い)と記す。カナダ洪門については不明だが、隣接する米国カリフォルニア州の影響を受けている地域でもあり、やはり同様であったかもしれない。なお、著者がヴィクトリア大学名誉教授で洪門組織とも近い関係にある黎 [2015] には、大戦後のカナダ社会におけるカナダ洪門についての反社会活動の記述は存在しない。

23) 王 [2011] 14 ページ

24) 山田 [1998]

<参考文献>

内田直作「三藩市唐人街の社会構造 (五)」『成城大学経済研究』24 卷、1966 年

内田直作「三藩市唐人街の社会構造 (六)」『成城大学経済研究』25 卷、1967 年

内田直作「三藩市唐人街の社会構造 (七)」『成城大学経済研究』26 卷、1968 年

山田賢『中国の秘密結社』講談社、1998 年

並木頼寿「反清復明を叫んで 天地会／哥老会／三合会」(野口鐵郎編、綾部恒雄監修『結社の世界史2 結社が描く中国近現代史』山川出版社、所収) 2005 年

孫江『近代中国の革命と秘密結社—中国革命の社会史的研究 (一八九五～一九五五)』汲古書院、2007 年

谷垣真理子「カナダへの香港人移民」『東洋文化研究所紀要』157 卷、2010 年

陳天璽「華人の移動とその目的—世代・地域別比較の試み」(塚田誠之編『中国国境地域の移動と交流—近現代中国の南と北』有志舎、所収) 2010 年

王維「バンクーバーにおける華人コミュニティ及びチャイナタウンの行事」『香川大学経済論叢』84 卷 1 号、2011 年

黎全恩『洪門及加拿大洪門史論』(電子書籍版)、商務印書館(香港)有限公司、2015 年

温哥华中華會館編委会『温哥华中華會館壹百壹拾週年記念特刊』、2016 年

University of British Columbia, Initiative for Student Teaching and Research in Chinese Canadian Studies, *JOURNEYS OF HOPE*, Vancouver, 2018

